

會



報

1964年4月

232

日本山岳会

山で会った人 (一)

松方三郎

山で会った人というものは忘れ難いものだ。

山の上で会っただけで、それきりで縁の切れてしまう人もある。むしろその方が多いのだが、それでも何となくあとあとまで、頭に残る人がいるものだ。

まるで知らない人に、思いがけなく親切にされて、その上に荷物までしょってもらったかと思うと奇妙な人物と道ずれになって、一緒の宿に泊ってしまったら、山もさることながら、山で行きあった人の中にも、忘れ難い人は、相당한数になってくるのである。

埼玉の田舎——といつては間違いかも知れない。行ってみれば結構煙突が林立しているかも知れないのだが——その埼玉に住むというN青年などもその一人だ。

いつかぼくが、小御岳流しの真中を独りで登っていたら、屏風の方の尾根通しに、独りで登っていたのがそのN君だった。向うも一人、こっちも一人、上の方に行く一本になるから、勢い顔を合わ

せることになるのだが、顔を合わせてきてみると、N君は富士は初めてだとのことだった。秋口の富士のそんなところで、人に会うことはまずない。珍しいこともあるものだと思うのはこのころの話で、N君はそもそものがはじめての富士だから、そんなことは考えの中になかったかも知れない。そんなことで白山岳の頂上に着いて午めしにして、写真をとった。——ぼくの方ではない——分れたのだった。そのとき写真ができたばかりのうちに送ってくれたというので、うちの番地を書いたから、それから間もなく、「白山岳頂上に立つ松方三郎君」といった鉢巻姿の余りさつそうとしないう写真を送って来た。もちろん、さつそうとしていないのはこのころの責任で、カメラの罪でもなければN君の腕の問題ではない。

とにかくそんなわけで、彼が埼玉県のさる町に住む青年であることや、その後の文通で、彼が絵が好きであることを知ったりしたのだった。

ところで去年の同じころ、九月に入ってからのことだが、ぼくはまた例のところを登っていた。小御岳ルートも多少知られてきたのであるうか、その日は珍らしく、ぼく達の前に二つばかり、二、三人の組が登っていた。ぼくたち——というのは、ぼくと息子たちだが、——は例によって、真中をまっすぐつめて行ったから、その二つの組の真中を登っていたことになるが、ぼくは少々のをいためていつになく難渋していた。そんなわけで白山岳にたどりついたころは、もうさつきの連中は遠の昔におりていて、頂上ではぼくたち三人だけだった。

そうしたら頂上の石の上に紙っぱらがのっているのを息子が発見して来た。飛ばないように小石で重しをおいてあったが、手にとってみると、

会長さん頑張ってください
私達は御庭に下ります。
先をいそぐので、失礼します。

と書いてある。署名はN君である。向うの尾根の上からはるかに見下ろして、今ごろそんなところを登っているデブはほかにはあるまいと思っただけであらう。だがそれにしても、少々心細い足どりだとも思っただけであらうか「頑張れ」という激励の言葉なのである。もちろん彼等は御庭をさしておりたのだから、この激励にこたえるよしもなく、彼もどうやら富士の病みつきになったな、と思うだけであつた。

会うといえ、小御岳流し、その上お互いに顔を見て話し合うわけでもなく、あゝ彼だったかと、あとからその姿を思い出すだけでまたそのままと分れてしまう。そんなのも悪くないなという気もしないではなかった。

とにかくぼくは握りめしをかじりながら、問題の人物との関係を息子たちに話したのだった。

「会長さん」といわれた以上そうもたもたもできない。幸いあとは下りだから大沢の砂走りを一目散に飛ばして吉田におりて来たのだが、彼等の方は「御庭に下る」と、例の書きおきに書いてあったから、もちろん山で顔を合わせようとも考えなかったことだった。

あとから来た便りによると、御庭は小屋は泊れず、三台からのバスもなく、船津までそのまま下りたとのことだったが、あの下りは考えただけでもぞっとするくらい長い。若いとはいっても、彼等もさぞうんざりしたことだろう。

in the

(A) ASSAM HIMALAYA

- | | |
|-------------------------|--------|
| Mondschichel | (6579) |
| Bratma | (6484) |
| 無名 | (6451) |
| White Sail | (6446) |
| Barnai | (6350) |
| Ayrsal | (6200) |
| XXIV Num Kun 山群にはなし | |
| XXV Nanga Parbat 前峰 | (7910) |
| “ 北峰 I | (7816) |
| Silberhorn | (7597) |
| Chongra 北峰 | (6830) |
| “ 中央峰 | (6448) |
| Ganalo | (6605) |
| KARAKORUM | |
| (南東端より西に向うが
番号は坂のもの) | |
| (1) Saser Muztagh | |
| Saser Kangri I | (7672) |
| “ II | (7513) |
| (Shupa Kunchang) | |
| “ III | (7495) |
| Cloud Peak | (7415) |
| (2) Rimo Glacier 山群 | |
| Rimo I | (7385) |
| “ II | (7233) |
| “ III | (7169) |
| (3) Kundan 山群 | |
| Mamostong Kangri I | (7525) |
| “ II | (7071) |
| “ III | (7016) |
| (4) Apsaraas 山群 | |
| Apsaraas I | (7245) |
| “ II | (7239) |
| “ III | (7230) |
| (5) Teram Kangri 山群 | |
| Teram Kangri I | (7463) |
| “ II | (7406) |
| “ III | (7381) |
| Mount Rose | (7202) |

(6) Mt. Ghent 山群 Ghent 北東峰 Hardinge (7342) (7092)	Savoia Grati I " II (7060) (6945)	Shispare 無名 (7610) (7329)	(1) 東部 Shachaur 無名 (7116) (7131)	余程大規模で、学問的な科学調査(7 クセサリでないもの)でもなければ 金は出さない。自分達が勝手に行く遠 征なんかには金を寄附する人はいないの だ。従ってアメリカでは、中級程度の 遠征では、自力で行くより方法がな い。だから行きたい者が貯金をして、 たまった頃に大ものを、ということに なるのである。その個人的な貯金力 と休職力(?)のあるところが又、わ が国とは違うのである。
(7) Sherpi Kangri 山群 Sherpi Kangri 西峰 (7380) (7303)	(19) Baltro GI North 山群 Pyramid Seven Pagodas (7170) (6735)	(25) Haramosh 山群 Haramosh II (6684)	Urgend 無名 (7037) (7020)	今年(1963年)は、4隊ばかり出か けるようだが、4000 m以上の処女峰が 殆んどなくなっているのは淋しい。残 されていた Hunter South (4256 m) と同 Center (4114 m) も 1963 年に J. Vin Holman 隊が登った。Variation では McKinley South (6191 m) が H.A. Carter 隊によって南東尾根から 登られた(1963年)。3000 m 級で私の 知っているのは Gerline (3840 m), これは Paul Crews (USA) が登っ た。5月28日付の Carter からの手紙 によると、Lionel Terray の隊が今年 Alaska に遠征し、McKinley の南東 13 キロにある Huntington (3730 m) に挑んだが、頂下 180 m で追返さ れたとある。フラスコもいよいよ Ala- skaites 眼をつけたにせうらしい。
(8) Saloro Kangri Saloro Kangri II (K 35) (7705)	Pyramid Biale (6729) (6257)			早稲田が Ecuador にある Altar (5404 m) の初登頂を目指して出かけ たが、これは 1963 年に Italy 隊が登 頂済み。Chile の Altar (5222 m) は 1920 年以前に登られている。Andes では Cord. Real de Chiquimani (5550 m) が登られた(1963年、6月)のが最 大の new 南 Africa の Robert Reinecke 隊によってである。
(9) K 12 山群 K 12 (7428)	Trango Towers Paju Peak I (6755) (6600)			
(10) K 6, 7 山群 K 6 K 7 (7281) (6934)	Crevasse 氷河 無名 (7264) (7089)			
(11) Baltro Kangri 山群 Baltro Kangri I (?) (?)	(21) Latok 山群 Ogre (Bainta Brack) (7284) (7144) (6947)			
(12) Chogolisa 山群 Chogolisa 南西峰 (7665)	(22) Rakaposhi から東方 Minipin Malobiting 西峰 (7253) (7453)			
(13) Masherbrum 山群 Masherbrum 西峰 (7806)	" 中央峰 (7291) (6985)			
(14) Sia Kangri 山群 (7082)	Laila Makrong (6608)			
(15) Gasherbrum 山群 Urlok II (7350)	(23) Hispar 氷河北側 Khangyang Kish (7852) (7492)			
(16) Broad Peak 山群 Broad Peak 南東峰 (7721) (8000)	" 無名 (7108) (7025)			
(17) K2 山群 Windy Gap 北峰 (7016) (7544)	(24) Batura 山群 Batura Peak (?) (7785) (7143)			
(18) Savoia Grati 山群 Angel (6805)	Kampire Dior 無名 (6885) (7710) (7284) (7388)			

★ この表について (その他)

この表は G.O. Dyhrenfurth が
Die Alpen の四季報第四号(1963)
に、最終的に発表したものに基づいて
いるが、勿論そのままではなく、自分
の調べたものも加えてある。Hindu
Kush に関しては、近く「山と溪谷」
に「Hindu Kush 覚え書」として出
る筈なので、それを参照して頂ければ
幸いである。

また、分類法は、今いろいろと迷っ
ていて、七月頃に出る白水社の「世界
の山」に書いたものとも多少違う。こ
れについては、皆さんのアドバイスを
頂きながら、そのうちに、ガッチリし
た便利なものにしてみたいと思ってい
る。概念図についても同様である。

ヒマラヤでもカラコルムでも、今は
厄介な国際情勢の故に、外国人には簡
単に入れないところが沢山ある。

然し、Karakorum でいえば Siac-
han, Baltro, Pannah, Hispar な
どの氷河の周辺、Himalaya では
Dhaulagiri, Annapurna などの山群
の中に、相当の大部分がまだまだあ
る。

赤線の向う側はソ連や中共に委せ
ておいても、われわれに与えられてい
る可能性は無限に近い。大いに研究し
て、世界の屋根の開拓に挺身して頂き
たい。但しソロソロ出て来ている。安
易な気持ちでのカミナリ登山はやめて
欲しい。これを抑制する意味からも、
リーダーの選択は慎重でなければなら
ない。

アメリカ山岳会誌の編集長 H. Ada-
ms Carter とは、手紙でいつも連絡し
ているが、そこで二カ月毎に発行され
ている News(会員だけに配布)の最近
号に、日本隊の動静が出ていた。いつ
か手紙の中で、日本の記録なしに、
ヒマラヤ史はないと賞讃の言葉が書い
てあったが、全くその通りで、日本人
のわれわれでさえ驚いているのだから、
向うさんが当然としているのも無
理はない。

それにしてもアメリカは、散発的で
はあるが、やるとなると大ものを見事
に片ずけていく。(これに比べて日本
の遠征隊のは風漬し型とでもいえよう
か) これはアメリカの国情にもよるも
のと思う。というのは、そこでは登山
がわれわれが思うほどポピュラーでは
なく水準以上の金持ちでなければ山登
りなんかはしていないし、世間でも、

ヒマラヤ便り

立教大学バルン遠征隊

山野井武夫

三月六日羽田を発ち、七日カルカタに到着、以後十六日迄通関及輸送打合わせにかかりました。結局荷物は列車に貨車を連結させパロニイ經由ジョグバニに送らせることにし十六日ハウラーを發ち十八日ジョグバニに着きました。通関業者は領事館の紹介でC. J. B. という男に依頼しましたが、殆んどの事務をこちらでやり、総費用は一、〇五〇インド・ルピーで荷物をジョグバニに送ることができました。シエルパはカトマンズできめました、今年のプレ・モンソンは日本の三隊の他英国のガネッシュ、ドイツのチャー・オエー及びタルン・ピークの六隊しかなく、シエルパは余っている様でした。私達はサーダーにネミ・シエルパ（ガルトウエンの従弟子）クックにアン・ダワ（61年P-29、62年ムクト・ヒマール）、高処用シエルパとしてアンタルケイ（63年シャルプー）、ラクパ・ノルブ（59年ヒマルチュリ）、パサン・ノルブ（59年ヒマルチュリ、61年P-29）、パサン・カミ（61年ランタ

ン・リルン）を契約、他にキッチン・ボーイ二名、マイル・ランナー二名をやりました。殆んどの者が日本隊と何等かの関係があり、且つクムバ・カルナヒマールにいったことのある者達です。

カトマンズでは神原夫妻に大変御世話になりました。神原さんの紹介でコロネル・ワイリーを訪ねダラン・バザールにある英国のゲルカ連隊に泊めていただくことにし、全員ダランに集結したのが、三月二日です。私達は医者がいないのに、病氣についてなく、カトマンズではリエゾンがマラリヤで倒れ、金はとられるわ、出発は遅れるわで一さわざあり、その上、三月二十六日、六十人のポーターでダランを出發したところ四月二日キッチン・ボーイの様子がおかしくなり、ダランに下ろしましたが、心配していた通りチキン・ポックスでした。

その後キャラバンは順調に進みセドアという最後の部落にて、ポーターを代え、四、二〇〇mの峠を越えセドアから六日のキャラバンでバルン湖の上部、四、九五〇mの地点に到達し、ここにB・Cを建設したのが四月十一日です。キャラバンにでてからは、食糧の買出しから、ポーターの交替まで五九年のヒマルチュリの経験が役

に立ち、あまりにスムーズにいつてしまったのに面喰っている位です。

こゝB・Cはマカールの直下にある、全く素晴らしい景色のところです。南東に面している故と、今年は雪が少いとかで、草地になっており快適な生活を送りつゝあります。四月十四日より私は上に上りプラトリー氷河の上迄行き、バルンツェを見たいと思つております。キャラバンに入ってからマカール、チャムラン・ピーク六等は一、二度見えましたが、バルンツェ、ベタンツェ等は全然見えないので何となく気が落ちつきません。B・Cが高い処にあるので、バルンツェは三ヶ所のキャンプで登れると思ひ、バルンツェの予定期間を五月五日迄と決めました。その後隊を二分し、本隊は荷を持ち往路を帰り、他は六名位でベタンツェを登頂後、一九五四年ノーマン・ハーディー氏が越えたチョポルウ北側の六、二二〇mのゴルを越えてローツェ氷河に出てみたいと考えております。

会の皆様に宜しくお伝え下さい。（四月十三日付、B・Cにて松田雄一宛）

ベタンツェに登頂
立教大学登山隊の隊員二名とシエルパ二名は五月十六日、ベタンツェ（六七二九m）の登頂に成功した。

— ギド・レイ抄 —

「モンテ・チエルヴィノより」

日高信六郎訳

|| 山とおそれ ||

原始生活のおそろしさに慣れることが出来ない人が、雄大な高山の前に立つと、生れてはじめておそれという、見なれぬかたちに見える。自然の不羈奔放な力に対して、素手で立ち向わねばならなかった、ふいふかしの先祖からつたわった本能の漠然たる痕跡を、おのれの身うちに見出すのである。それはあたかも、幼児が、わけのわからぬ騒音にみちた深い森のなかに、たった一人で置かれたとき、その血管をつたわる身ぶりのようなもので、生をかこむ不可知なものの限り知れぬ力の神秘的な感覚、古人のいわゆる「timor perennis」である。

ここでは、山がまわりを囲んで、物すごくつき立ち、そこではベツカ・デ・クレトンから一千メートル下の谷底まで、一気に落ちる石なだが、うなりを立て、深い峽

谷の底にかくれて、たぎり落ちるマルモーレの急瀧がとどろいて、自然のいぶきを周近にきかせる——こゝまで来ると、この本能的な弱さの感覚が眼ざめる。こゝでは自分が小さく感じられ、子供にかえったような気持ちになる。ああ何とありがたい山。

こゝでは、他人の信心に敬意を表して沈黙を守るくせを持たぬ人でも、おとなしくしているし、皮肉屋でも、ガイドがマドンナの小さな像の前を通りすぎるとき、おさい銭箱にお鳥目を入れ、帽子をとるのを見て、笑う気にはならない。

|| 山を愛する ||

そのころ、私は、身も心も打ちこんで、ひたむきに山を愛し、初恋のように、身をなげかけて山をたのしんだ。たぶん、私は考えることはもちろん、ろくろく観察することも知らなかったのだろう。自分の軽快な脚力にものを云わせて、いゝ気になり、ぐんぐん登って頂上をきわめ——弁当をむさぼり食つてしまふ——急斜面をころがり降り、麓について、うまいめしをたらふく食べてグッスリ寝るたのしさだけで、満足し切っていた。

しかし、そのころ私の眼のまゝにあらわれたものや、登山の途中でのちょっとした出来事や、ガイドたちのふるまいや、何かの機会に私に話しかけた彼らのことばさえも、今の私には、去年見たり聞いたりしたことよりも、もっとハッキリ眼の前にうかぶのである。そして、アルプスの山小屋の煙のにおいは、いつも私の心のかに、小屋の屋根うらのまぐさのうで、友達と笑ったり計画を立てたりしていると、下の厩では、牧牛のくびにつけた鈴が、われらのために子守歌をかなでている、あの遠くすぎ去った夕べを、かぎりなく好ましいものとして思い起させるのである。

私は、山に敬意を払っていたが、まだ山を恐れることをちっとも知らなかった。悲運がわれわれのそばに落ちかゝるまでは、決して不運を信じないものだ。しかし、われわれに最も近い人の命を奪った打撃は、われわれに深刻な創を与える。

ある日——それから十八年もたった今でも、それを思うと悲しくなる——私は自分よりも大胆な友だちに引きつられて、ガイドなしのマッターホルン登りを企てた。この計画はすばらしく、且つ手ごわいものと思われたが、いっこう

恐ろしいとは思わなかった。今になつてあの時のことを考えると、ちっとも心がかえが来ていなくて、こんな誘惑に屈したのは、よくなかつたということが、よくわかる——しかし白状すると、あの時には、よろこび勇んで承知したのである。

われわれの準備は整つた——出発まで幾日もなかつた——そのとき、山からおそるべき警告がとどいた。私にごく親しい、血気ざかりで、利口な若者（訳者注、かれの弟）が、友人と二人きりで、コル・デュ・シェアンにのぼる途中高い岩壁から墜ちて死んだ。

それは私の生涯にとって、実に痛ましい日であつた。私はこの年のマッターホルン行きをやめた。それ以来、この山にガイドなしで登ることは、二度と考えなかつた。

この日からのち、私は全く別な気持ちで山に對した。私にとって山は今までもよりもずっと冷厳に、ずっと力強いものに見えた。私はさらにむつかしいみちを歩いていくことを感じ、私の山に對する愛情はさらに省察を加え、さらに深みを増して行つた。

私は、心をいたましめることによって、山を如何に愛すべきかをさとしたのである。

山を讃える

たった一度ジオメンで一人の紳士——教養のあるふとつた都会人——に出くわしたことがある。

彼は自分の荷物の中に、新聞の束と一緒にわが国の多くの都会ではやりになつてゐるアルピニストに對する悪気のない反感を入れて、ここまで持つてきていた。そして彼は、私がこれから説明するように、實際的な感覚を交えて、その氣持を説明した。即ち、人々が車か驢馬にのつて行けるところまでは、山が面白い、が、それから先きは虚栄か狂気の沙汰だと。彼はいう、自分は二十以来毎夏を山で過す習慣になつてゐる。一番いいホテルにとまり、ゆつくりおちついてアルプスの風景をながめる、それは君たちのような山に氣をとられて、せかせかと谷間を歩き、宿についたかと思うと、すぐ登山に出かけたり、時にはまわりがまっくらなうちに夜立ちをするような連中よりは余程よく風景を觀賞するのだ。

ま下山のことを考えなければならぬ。

傾く日は君たちをせき立てる、ザイルにすがつて大いそぎですべり下り、懸崖をかけ下り、息を切らして安全な小舎につくまでは体のふるいが止まらない。それにつけ加えて彼はいう、

「君たちは奇蹟的な精力をふりしほつてマッターホルンを「やつた」と威張ることが出来る、しかし君たちはあんな高いところで、どうしてその場所の壮嚴さを味わうことが出来るのか、自然がかなでる神秘的な歌のしらべのどんなところを聴き取つたのか？」

そして彼は、一度も危険を冒したことがないのに、山の魅力が一番よく知っていると結論する。私は心の奥でこの男に對してあわれみの情を起した。彼は海浜に佇んでいながら航海をしたと思つたり、窓の下でそくばくのセレナードを歌つただけで女を恋していると信ずる男に似てゐるように見えた。

然し山はかくも偉大に、かくも寛容であるから、山を研究の対象とする学者にも、山にインスピレーションを求める画家や詩人にも、激しいつかれを欲する力づよい人たちに、町のむしあつさ

や、わずらいから逃れて肉体的、精神的健康のかぎりなく清いこの泉を汲んで元氣を回復しようとする疲れた人たちにもわけへだてなく、すべての来るものをよろこんで迎え、だれに對しても同じように親切なのである。

本号目次

- ・山で会つた人(一)……………一
- ・ヒマラヤ、カラコルム、ヒンヅークシ未踏の峯一覽表……………二
- ・立教大学、バルン遠征隊便り……………四
- ・ギド・レイ抄……………四
- ・一九六四年度通常會員總會……………六
- ・黒部の今と昔(下)……………八
- ・圖書紹介……………一〇
- The Alpine Journal Vol. 68, No. 307……………一〇
- この山なみのこえ……………一〇
- ブロード・ピーク……………一〇
- ・會員通信……………一三
- ・国体実施踏査の記……………一三
- ・會員吉川良平氏逝く……………一三
- ・片瀬峠……………一三
- ・岳人の奥津城……………一三
- ・会務報告……………一四

日本山林美術協会

日本山林美術展

- ・特別陳列 南アルプス……………一
- ・六月十六日(火)～二十一日(日)……………一
- ・会場 池袋三越……………一

後援 日本山岳会
林 野 庁

一九六四年度

通常会員総会

四月二十五日(土) 午後三時より、御茶ノ水ホールに於て開催。

総会次第
会長挨拶 松方会長

報告事項
一、一九六三年度事業報告

二、各支部の報告及び挨拶

(1)宮城支部 北川支部長

(2)越後支部 藤島支部長

(3)静岡支部 井口正男氏

(4)信濃支部 清水悟郎氏

(5)山梨支部 飯野享氏

(6)関西支部 大木保太郎氏

(7)東京支部 関口周也氏

三、一九六三年度決算報告

付議事項
四、一九六四年度予算案

五、理事改選の件

六、監事(一名)改選の件

七、評議員(一名)追選の件

追加報告
エヴェレスト登山計画について

閉会の辞
折井理事

予算案を除く各議事については満場一致で可決された。予算については、「山岳」出版費を財産運用利息、広告収入等の増加を計り

一〇万円程度増額を考慮してほしい旨の発言あり、新理事により研究すること。会員名簿は、経費の関係もあるが少くとも三年目毎には発行することなどを決定した。図書室は本年オリンピック終了時期には移転することになるので、新設を準備する必要がある、会員各位の協力を特に会長より要請があった。

エヴェレスト登山について(1)時期は一九六六年ブルームスーン期。但し必要に応じて一九六五年に先遣隊を送ることがあり、この手配も済ませてある。(2)登頂を主たる目的とするものであるが科学班の参加を考慮している。(3)隊長推挙に

太郎、日高信六郎、辰沼広吉、星野紀夫、今井雄二、坂下心一、牧野衛、黛治也、相沢裕文、山崎安治、三田幸夫、吉野慎造、小方全弘、松田柳子、松方三郎、望月達夫、野口末延、川崎巖、清水悟郎、深田久弥、倉島正吉、須田紀子、北川正次、小倉厚、藤島玄、酒井敏明、飯野享、榎有恒、佐藤久一、朗、栗林一路、水田健之輔、吉沢一郎、神谷恭
一九六四年度理事

副会長 松方三郎
渡辺公平(兼編集一般)

評議員一名は村井米子氏を追選
常任評議員 藤島敏男、神谷恭
交野武一、小原勝郎、望月達夫(山岳編集)、織内信彦、加藤泰安、藤井運平
評議員 日高信六郎、早川種三、成瀬岩雄、伊藤秀五郎、今西錦吾、今西寿雄、橋本三八、青木昇、篠田軍治、入沢文明、川喜田壮太郎、吉沢一郎、津田周二の各氏。及び各支部長
一九六四年度
東京支部総会
四月二十五日午後二時より御茶ノ水ホールにて開催

次 第
一、開会の辞
二、支部長挨拶
折井 健一
石原 憲治

三、一九六三年度事業報告
四、一九六三年度決算報告
五、一九六四年度予算案
六、委員及び監事改選
七、閉会の辞
八、尚議事はすべて満場一致をもって可決された。

監事一名は松本熊次郎氏を再選

昭和 38 年度決算報告

社団法人 日本山岳会東京支部

科 目	予 算	決 算	備 考
収入の部	74,442	74,442	
前年度繰越金	70,000	70,000	
入部費		50,280	映画会48,280 はっぴ売上2,000
業務収入		5,354	
支 出 の 部	144,442	200,056	
事業費	55,000	27,385	富士及谷川講習会
業務費	15,000	18,455	
事務費	3,000	1,500	
設備費	20,000	19,040	スライド・8ミリ フィルム
雑費	2,000	2,020	
その他	26,000	28,900	ロープ2本
繰越金	2,000	2,290	
繰入金	21,442	0	
繰出金	0	12,000	
繰入金		74,442	
繰出金		14,024	
繰入金	144,442	200,056	

上記決算報告は相違なきものと認めます。 支部監事 山下一夫 沼倉寛二郎

昭和 39 年度予算案

収入の部	支出の部	合 計
前年度繰越金	事業費	40,000
支部会費	業務費	20,000
	事務費	3,000
	設備費	10,000
	雑費	2,000
	その他	3,000
	繰越金	15,024
	繰入金	6,000
合 計	合 計	99,024

昭和 38 年度 収 支 決 算 表

38.4.1-39.3.31

科 目	収 入 の 部		予算に対する 決算増減	科 目	支 出 の 部		予算に対する 決算増減
	予 算	決 算			予 算	決 算	
経 常 収 入	2,230,000	2,792,700	562,700	事 務 費	923,000	893,638	29,362
入 会 金 費	150,000	551,000	401,000	俸 文 給	300,000	295,000	5,000
会 費	2,080,000	1,843,200	236,800	文 具 費	30,000	19,165	10,835
旧 年 度 会 費		333,100	333,100	印 通 費	150,000	93,266	56,734
		65,400	65,400	交 通 費	417,000	454,122	37,122
					26,000	32,085	6,085
事 業 収 益	932,000	1,330,008	398,008	管 理 費	168,000	158,897	9,103
山 岳 告 料	200,000	228,000	28,000	火 災 保 險 料	12,000	7,875	4,125
会 報 廣 告 金	35,000	36,050	1,050	営 繕 租 税 合 計	7,000	7,450	450
山 日 記 売 上	20,000	131,956	111,956	諸 光 電 費	30,000	31,000	1,000
山 山 員 室 附 収 入	530,000	721,280	191,280	火 災 保 險 料	49,000	39,806	9,194
山 山 員 室 附 収 入	15,000	3,950	3,950	火 災 保 險 料	70,000	72,766	2,766
山 山 員 室 附 収 入	100,000	150,412	50,400	事 業 費	2,071,000	1,842,860	228,140
山 山 員 室 附 収 入	20,400	20,400	0	會 費	50,000	46,177	3,823
山 山 員 室 附 収 入	32,000	6,140	25,860	交 際 費	40,000	34,300	5,610
山 山 員 室 附 収 入		5,000	5,000	報 告 費	120,000	33,106	86,894
				山 岳 出 版 費	270,000	227,414	42,586
				山 岳 出 版 費	700,000	913,994	213,994
				山 岳 出 版 費	50,000	67,075	17,075
				山 岳 出 版 費	40,000	41,500	1,500
				山 岳 出 版 費	100,000	93,305	6,695
				山 岳 出 版 費	100,000	208,015	108,015
				山 岳 出 版 費	70,000	70,000	0
				山 岳 出 版 費	90,000	34,765	34,765
				山 岳 出 版 費	100,000	73,119	16,881
				山 岳 出 版 費	341,000	341,000	0
				合 計	3,162,000	2,895,395	266,605
				剩 余 金		1,227,313	
合 計	3,162,000	4,122,708	960,708			4,122,708	

社団法人日本山岳会 昭和 38 年度収支決算表及財産目録につき監査致しましたところその正確なることを認承致します。

昭和 39 年 3 月 31 日

会計監事 野口 末延 同上 松本熊次郎

財 産 目 録 (39.3.31)		
基 本 財 産	金 額	備 考
貸 付 信 託	100,000	
運 用 財 産	金 額	備 考
建 物	1,386,000	含上高地山荘
器 備	275,000	
物 品	663,000	
書 金 託 託 金	1,581,444	
預 信 信 託	1,590,000	
行 付 替	352,265	
銀 貨 金 振 現	896,522	
	50,195	
小 計	6,794,426	
合 計	6,894,426	
基 金	金 額	備 考
遭 難 対 策 基 金	84,375	
図 書 基 金	11,450	
図 書 室 基 金	113,100	
合 計	208,925	

ルーム移転のお知らせ

日本体育協会の代々木への移転にもとない本会も六月末、下記のところへ引越すことになりました。国電原宿駅、地下鉄銀座線外苑前下車、いずれも歩いて 7~8 分です。

渋谷区原宿 1-104 外苑コーポ内

昭和 39 年度収支予算表 (案)			
収 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
経 常 収 入	2,530,000	事 務 費	918,000
入 会 金 費	150,000	俸 文 給	300,000
会 費	2,380,000	文 具 費	25,000
		印 通 費	150,000
		交 通 費	26,000
			417,000
事 業 収 益	977,000	管 理 費	166,000
山 岳 告 料	200,000	火 災 保 險 料	10,000
会 報 廣 告 金	35,000	営 繕 租 税 合 計	7,000
山 日 記 売 上	570,000	諸 光 電 費	30,000
山 山 員 室 附 収 入	17,000	火 災 保 險 料	49,000
山 山 員 室 附 収 入	135,000	火 災 保 險 料	70,000
山 山 員 室 附 収 入	20,000	事 業 費	5,423,000
		會 費	50,000
		交 際 費	40,000
		報 告 費	120,000
		山 岳 出 版 費	270,000
		山 岳 出 版 費	700,000
		山 岳 出 版 費	60,000
		山 岳 出 版 費	40,000
		山 岳 出 版 費	100,000
		山 岳 出 版 費	100,000
		山 岳 出 版 費	85,000
		山 岳 出 版 費	90,000
		山 岳 出 版 費	397,000
		山 岳 出 版 費	341,000
		山 岳 出 版 費	30,000
合 計	3,507,000	合 計	3,507,000

黒部の今と昔(下)

— 三水会講演 —

冠 松次郎

黒部の今と昔(承前)

それから上流には、猫又、樺平、東谷の発電所が完成して、御前谷のダムから下流約四〇キロの間の黒部の流れは全く荒廃してしまいました。

その時分には先程も申し上げたように棒小屋の小屋場へ行つてそれから十字峽へ行くまでがなかなか大変で、最初は剣沢がどこへ入っているかわからない。剣沢というのは非常に大きな谷だけれども落ち口は非

常にせまい、下から見てもどこが剣沢かわからない。で、いよいよ棒小屋沢のところから出て大きな岩の上へ上つて、

そして覗いてみてはじめて大きな剣沢があるということがわかった。そのときの地図は今もありませんけれども、棒小屋沢は出て

ないんです。剣沢が入ってからしばらく上で棒小屋沢が入っている。で、実際に剣沢へ

きてみると、後から四段の滝が入ってきているのでビックリしたんですが、そのときは沼井さん、岩永さん、私と三人で相談

したんですけれど、とにかく谷がな

いんだから棒小屋谷にちがいない、で、そこを大へん勝手ですけれど、十字峽と名を

つけたんであります。

— 最近の黒部下の廊下 —

私は昨年(昭和37年)の八月に、大町からダムサイドに入り、さらに黒部ルート

てがっかりしました。

いままで水がとろとろと流れていた黒部がですね、兩岸ずつと曾って谷の底であつた岩石の段丘が出てその間に去勢された水がちよとろと力なく流れている。しかも濁った水が流れている。実にどうもなんともいえないさびしさを感じたわけ

であります。

十字峽へ泊りまして、そして剣沢を見る

とこれはもう実にハツラツたる青春の谷で滝と奔流をつないで光って流れている。大

体黒部の水が剣沢の幾層倍あつたか、十倍

どころじゃないだろうと思う。その水がち

よろちよと力なく流れている。剣沢の水

は立山、剣、黒部別山、仙人山の水を合せてすばらしい勢いで真白に光っている。黒

部の水は濁ってトロトロ流れている。これは「黒四」という大きな発電所ができて国

家の経済に非常に貢献しているんですから私どもはそんなことを言つたておつたか

いかに残念だと思ふのです。

黒部の原始境

それからつぎに黒部の原始境という話であります。原始境ってのは日本じゃ近代登山なんていったときには頂上の登られてない著名な山は、ひとつもなかったのであります。だから原始境って言えば至るところにある。

— 剣沢のこと —

剣沢は、私は大正十五年、昭和二年、昭和四年に入りましたが、ちかごろ昨年、一昨年あたりからだいぶ若い人たちが入つて剣の大滝も大体わかつたらしいのでありますけれど、とにかく剣へ登る人は、剣沢を見なきゃも足りないだろうと思う。岩登りばかりでなく大滝も見てきた方が、と私はそういう風に考えています。

×

私が昭和二年、岩永信雄さん、亡くなつた別宮貞俊さんと三人で剣沢へ入ったときは、十字峽から棒小屋の滝を越して、その先の急な岩壁をザイルで下りて美しい丸い淵のところまで野営をした。あくる日剣沢へ入るためには黒部本流へ橋をかけなければならぬ。前の年見ておいた一ヶ所丸い淵の上手のせまいところに山の人に木を伐らせて二度ほど橋をかけはじめて剣沢へ入つたのです。

谷に強い人が来てくれたので行けた。われわれだけではとても歯が立たなかつたのです。

二人で棒飛びをやつて向う側へ行つて、材料があつたので橋を架けて、それで渡つた。

それからまたしばらく行くと剣沢には珍らしい草地の平がある。もう九月でしたが雪の間からウドが出ているんです。そこを別宮さんが「剣沢平」としようじゃないかと皆でそういうことにきまつたりしました。いまでもあるでしょうが……

それを抜けるとこんどはさらに水が深くなり、滝近くなるものですから非常に勾配が急になり落差が強くなつてきました。大きな岩ばかりで、とがった岩にだきついた

となつて、左岸（仙人の側）を行つたとこ
ろが手のほどこしよがない。それから右
岸を行つたが途中でオデコのようにかぶつ
ている壁にずい分悩まされた。

水は狭くて深いのです、電気アメのよう
に光ってくるくる廻っている。淵も河原も
ほとんどない、真線的に突込んでいます。ど
うやらこや大滝のちよと上まで行
き、もうそこで行けなくなつてまた戻つて
きて二俣へ泊つて南仙人山へ上つて、それ
からガンドウ尾根という悪い尾根を下り
て、途中から大滝の下あたりへ見当をつけ
て下りて行くとそこはエライところで、も
うすぐ剣沢平が見えていゝといふのにどう
しても下りられない。クレバスが口を開け
て大きな滝がかかっている。

私も残念だつたのですが、戻つて上で
泊つて、翌くる朝、丸太を二三本持つて行
つてまたやつてみた、結局どうしても下り
られない。仕方なしに降参しましてね。そ
の翌年が、さつきのお話の昭和二年で、下流
から上つてはじめて大滝を見たわけだ。

大体後立山の側にもとの東信歩道とい
うのがあつて、そこから見ると、一番上の滝と
一番下の滝、それから故塚本繁松君が行つ
たその上の滝はわかつて見えていゝのです
が、その間に小さい滝が三つばかりある。
それを私もは行かなかつた。それを最近
に二三の方がいらしてご覧になつた。

とにかく剣沢というのは私も寡聞で、
そういうことを言つては悪いと思うんです
が、日本での絶嶮だと思ふんですね。

昭和四年六月には文部省の撮影隊と行き
ましたが、このときは、雪の上ばかりずつ
と行つたので谷川の音が聞えない、実にも

の淋しくもの足りない、そのかわり一日か
かつたところも二時間くらいで下りてしま
う。簡単だけれどもつまらない気がしま
した。やはり谷川は流動ですね、それから
潭、淵で沈滞する、それがなければ谷川の
面白味はないですね。

余談になりますが、仙人の池というの
は、いまはバカに有名になつて写真も沢
山あるが、その時分はだれも行かなかつ
たんです。別宮さんがそこではじめて名
写真をとつた。三越の展覧会にも出て、
それで有名になつて、いまじゃ小屋もで
きたし、だれも知らないものはないが、
その時分には全く人が行かなかつたも
のです。

◇黒龍川の柳又谷、北又谷◇

黒龍川という谷がおそらくこれは日本
でも有数の谷だと思ふ。この黒龍川は日本
山岳会の故塚本繁松君が、私より先きへ行
きまして、相当歩きました。私はそのあとを
ついて行つたわけでありすが、この谷は
黒部のいまの上ノ廊下、平から上流の黒部
川の源流地までと、その流域も広さも延長
も同じくらいに広い。しかも黒龍川の景色
とてものはやはり上ノ廊下と比べてちつと
も遜色がない。それで柳又谷の非常に豪快
な峻嶒な景色と、北又谷の優美ないかに
幽スイな景色、その二つを兼ね備えている
のです。

柳又谷は全く道がない。北又谷は越中の
小川温泉から越道峠に入つて下りたところ
まではいまの朝日登山口の道がありすが
が、それから源流地までは道は全くない。
徒渉によるのと、キャンプを持て行かな
くちやならない。このように黒龍川の柳又
谷は男性的で、北又谷は女性的の谷で、実

にいいところでありすが、今日でも登山
者に会わないうらい静かなところなんで、
まあ一度北又谷と白馬以北の高原地帯を初
夏の六月から秋十月末くらいまでの季節に
ゆくりお歩きになるといいと思ひます。
そのほか小黒部谷とか棒小屋沢あたりにも
いいところがあります。

◇黒部別山◇

今日じゃ双六谷の方は伐採が入つてだ
いぶわるくなりましたが、黒部の方は昔から
盗伐はあつたんですが、伐採はなく原生林
であります。水はなくても黒部一帯の森林
でものは仲々立派です。

また最近では黒部別山の、——黒部別山
という山は立山側はゆるくなつて丸くふっ
くらとしていますが、黒部側は斧で割つた
ような岩壁で、その岩壁をコツコツやつて
いらつしやる方が一、二あります。いずれ
あそこも岩登りのお好きな方が多勢おいで
になるだらうと思ふのであります。

とにかくいまはヒマラヤだとか、アンデ
スだとか、これは非常に結構なんで、ほか
に道はなくなつたと思ふ人がありますが、
しかしいまの原始境つていゝのは至るとこ
ろにありますよ、日本アルプスばかりでな
く東北方面にもありますし、九州にも
中国地方にもあります。そういうのを若い方々
が天幕を持ってゆくり急がず歩いたら面
白いと思ひます。

自然の聲

ともかく私も別は別に冒険的に山へ行く
わけじゃなし、町に住んで、こういう東京み
たいなところへ住んでいゝと、原始的な風
景というものに始終心を惹かれて行きたい
と思つています。で自然の大きな原始的な
姿、それを求めて私も山へ入つていゝ。

それ以外になにも考えて居りません。しか
し自然ってものは不思議なもので、これは
すこし言ひすぎかも知れませんが、とにか
くいま「自然保護」ということがだいぶや
かましく言われていますが、その「自然」
というものはどんなものか、私はそれを知
りたい。「自然」といふもの、——それは
私どもの智慧や感覚ではとうていはいかり知
ることのできないほど、大きくて、そして
また小さなものだと思ひます。

故人の言葉に、

「大にして方処を絶し、小にして無限に
入る。」

というようなことを言つてありますが、
その通りだと思ひます。

とにかく宇宙万有を総括するもの、それ
が「大自然」である。また人生とはどんな
ものであるか、これは私にも未だにわかり
ません。

しかし人は自然から生まれて、また自然
に還る生物である、ということだけは確か
だと思ひます。

そして人は純一無雑な心を以て自然に
対するとき、自然はその純な心を通じて、
さまざまなことを教えて呉れます。私もい
ま現にそういうことを経験してゐるのであ
ります。

とにかく自然の聲、それは私どもの人生
を導いてくれる大導師の聲であると思ひま
す。すこし大げさな、雑ばくな話で相す
ませんが、これで終ります。（拍手）

△編者付記△

前号にひきつづき冠氏の講演要旨を掲載した。
冠氏の折目正しい、そして歯切れのいい東京こと
ばを文字で表現することはむづかしい。講演後の
質疑応答については次号に譲る。



中村清太郎画

図書紹介

年エヴェレスト
隊の輸送とシ
エルパ(ロバ
ツ)。*一九六
二年英ソ隊パ
ール遠征報告第
二部(アキノウ
ト・デビス)。
*スワットおよ
びインダス・コ
ヒスタン(T・
ブラーハム)。
*ムーアの歯

The Alpine Journal
Vol. LXVIII, Nov 1963.

No. 307

海外登山をはじめ、困難な岩登りや、登山史に関する記事など例によっていかにもACらしい奥行きと巾の広さが感じられる。主な内容は次の通りである。

*パイネの中央岩塔(C・ボニントン)。*ダウラ・ヒマール(J・O・M・ロバーツ)。*ヒウンチュリ・パタンへ(P・R・ステール)。
*スイスのパイオニヤールたち(アーノルド・ラン)。*一八五三年におけるモンブラン登頂に関するスイス版さし画に関する若干のノート(H・カー)。*一九六二年リディング大学アデス遠征(R・ハンター)。*パーティーゴウ、一九六二年(P・クリウ)。*パタゴニアおよびティエラ・デル・フエゴの旅(E・シブトン)。*一九六三

A・G・スマイス)。*AC失格者(T・グレイクニー)。*パーカー兄弟とマッターホルン(O・ダンガー)ほか。

ロバーツ中佐によるシエルパ五名。サブ一名という軽登山隊の一九六二年秋ダウラギリ四峰南西面の偵察では、明らかに登頂可能なルートをつ二つ発見したと書かれている。パーティーゴウというのは、眩惑とか眼まいとかいう意味になるが、ラバドレ北壁、チマ・グラインデのコミチ・ルートなどの垂直な岩登りの報告で、題名が内容によくマッチしている。一九六三年エヴェレスト隊の輸送とシエルパ(ロバーツ)はアメリカ隊のトランスポート・オフイサーとして参加した筆者の苦心談だけに面白い。AC失格者(ブレイクニー)もたんなる記事で一八五八年から一九一八年までACに入会申し込みをしながら選ばれなかった人の名

前と経験、理由がくわしく発表されているのは驚くほかにない。

ダンガー氏の手になるアルパイン・ノートでは一八五九年から一九六三年まで一九九名におよぶ名誉会員について報告されている。英国三十名を筆頭とするそのうちわけの中にアメリカのルーズベルト大統領の名前もみえる。秩父宮殿下も一九五二年復活と明記されている。また昨年五月二十九日ウエストミンスター・セントラル・ホールで王立地学協会と共催でエジンバラ公殿下の臨席をおおきエヴェレスト登頂十周年記念会が開催された記事がとくに注目された。過去のエヴェレスト隊員の多くが顔をそろえ、出席者千七百名に及ぶ盛会だったという。(Y・Y)

この山なみのこえ

信濃毎日新聞社編

まい年たたくさんの遭難事件を起す山々を抱えて、いつもは遭難の防止に声をからし、遭難があると救助や死体の収容などの後始末を引きうけさせられる長野県の人たちは、じつに最大の被害者というべきであろう。信濃毎日新聞社が創刊九十周年記念事業の一として「山の遭難をなくそう」と題する記事を連載して、世間の人々に訴えその考慮と反省をうながす企画を実行に移したのは、まことに無理からぬところとうなずかれると共に、はなはだ時宜を得たよること

ばしい企てというべきである。ことに昨年一月から九月末までえん百五十回にわたったその息の長さには驚かされる。幹部の意気込みと関係者の努力に敬意を表し度い。

こんどそれが表題をあらため、一冊の本となって現われた。その中味を見ると、まず「遭難のカルテ」と題して十四のケースについて記録をあげ、そのおのおのについて登山家の批判を求めている。雪におおわれて氷結した死体や、難路を運びおろしているところなどの写真はいたましく、救助隊員の苦勞や肉身の悲しみがにじみ出ている。次には遭難のある度ごとにいやおうなしにそれと取り組まねばならぬ地元「遭難救助隊の悩み」や隊員の云い分を伝える。リーダーとして春山の縦走を遂げた本会々員野村哲也君の詳しい日記をのせて、社会人パーティーのあり方、指導、訓練、準備、安全などの問題にふれ、きわめて有益で適切な示唆を与える。「大学山岳部」については新制大学山岳部に内在する悩みや遭難につながる諸問題を探究し、「登山と教育」の項では高校生登山に関して教師の役割りのむづかしさと重要性を論じ、「夏山の科学」「冬山の科学」について一通りの知識を与え、「山のルールブック」では写真と実例を挙げて登山のエチケットを説き、最後に英、米、仏、伊、

日、スイスの著名登山家に「若い登山者たちへ」の忠言を語らせている。

若く元気で山好きの清水、塚原両記者が、冬と夏とを問わず、遭難と関わりと飛びだして救助隊と行動を共にし、つぶさに現場をしらべ関係者の話や識者の意見を聞いて生きた記事を綴ったものだけあって、貴重なデータをたくさん含んでおり、そこに引用された多くの先輩や現役の人たちの意見とともに、これを熟読玩味すれば、有益な示唆と教訓を得られるであろう。

この本の売り上げは、長野県山岳遭難対策協会の活動資金に充てられるという。重ねて信濃毎日新聞社の企てに敬意を表する次第である。(S・H)

B6判、本文三八頁、写真三二頁、昭和三十九年二月十二日二見書房発行、定価三八〇円。

ブロード・ピーク

マルクス・シュムツク
横川文雄訳

近頃は世の中が忙しくなっていて、部厚なドッシリした本を読む余裕のある人が少なくなった。本屋さんもそれに合せて、葉書位の大きさ(厚さはもっとあるが)の本をあとからあとと出している。簡単に出来るから、どうしても粗製になる。一つの例として、あるカラーブックの被い紙にある写真が裏返しになっているのもあった。

われわれはバカにされたように感じもするし、これによってそのシリーズ全体に信用がおけなくなつたことも事実である。

さて、折角、もとの本が落着いたガツツリしたものであるにも拘わらず、日本語になる時には、いろいろ家庭の都合で、その半分にもならない場合がある。何だか惜しいような気もするし、原著者に対しては相済まないのではないだろうか。

サワリだけ読んで貰えばいい、という理窟もなり立つかも知れない。忙しい人にはそれでもよい。だがサワリ以外のところに、案外、その本の真髓のひそんでいることが多いものだ。

横川氏が訳したシュムツクのプロード・ピークも半訳であるが、これは訳者の本意ではなく、多分に商業主義に負けた様子が見られる。訳そのものが立派であるだけに、誠に惜しいと思う。

時機に間に合せるよう急いで出した第一の証拠は、見開き写真に入れている、点線で示されているルートである。これをよくみるとわざわざ難しいところを選んで登っているように思えるが、実は、これは原本のままを印刷した誤りなのである。原本でも印刷してから気がついたとみえて、その三六三頁に訂正 (Berichtigung) が出ている。訳者はこれをみなかったのか、訳者の種本には訂正が出て

いなかったか、そのいずれかであろう。それによると、あの点線は上に三ミリ、右に五ミリずらしてみてくれと書いてある。原本に飽くまでも忠実であらんとするならば、これも序でに訳しておくべきであった。

第二に感心しないのは、この本が抄訳であるということとを、どこにも断っていないことである。それに訳者のあと書きも解説もない。これらは大概の本にはあるのであるから、書いておいた方が、読者にも親切だし、自分のためにも勉強になる。

第三に、訳者はドイツ語の先生ではあるし、今までも沢山の立派な訳本を出しているのに、誤訳なんてことは考えられないが、やはり弘法にも筆の誤りはあるとみえる。例えば、二五七頁と二五八頁に、雪風の落ちた跡、……雪風は積み重なってとか、四カ所に雪風が変に使われているので、原文をみたら Schneelawine である。

当然、雪崩か、ナダレと書くべきであつたろうが、横川氏がシュネーラビネを知らない訳がない。二五七頁目ともなれば、そろそろ校正にも(急ぐときには特に)アキが来る頃である。このアキのスキマのミスであつたのであろう。私は校正をする時、よく前からと後からと、中頃からと、三段構えでやるようにしているが、それでも見逃しがあるので、ヤレヤレと

思うことが屢々である。

横川氏は又、土地や人の名前を皆、ドイツ読みにする癖がある。七三頁のマクグナガはマクニヤガ (モンテ・ローザの東麓、イタリア領内)、それから人名のくんだりでは二七、三三、二七〇頁のティッチーはティッシーと直した方がよいようだ。七、二七八頁のマンニョーネはマニョーヌ。彼は最近 (一九六四・五・三) エフェル塔の人工登攀(?) をやったマニョーヌと思うが、いよいよ以って大空芸人になり下つたらしい。

又、一九八頁のシンキャンは、文部省の「中国、朝鮮の地名の呼び方はカタカナで書く。但し……」という原則にも拘わらず、私は新疆と書いて貰いたかつた。中央アジアの文献に親しみを持つ人々には、これではなければピンと来ない。尚、二一七頁のスキルブルムの標高のくだり、ディレンフルトの説によると、これは M・スペンダーが一九二八年に測つた、七三六〇 m の方がよいとしている。シュムツクの七四二〇 m はアネロイドである。従って私は「山日記」には、スペンダーの高度を入れておいた。こういうことは「訳者注」として入れておくのが常識であり、親切でもある。

酸素なしで、シェルパも使わず、たった四人だけで、八〇〇〇 m 級に登った、その勇敢さには、確かに頭が下がる。が、あんなひどい

目にあってまで、ああいうことをするのが、登山の本筋であるのかどうか、その批判は辰沼ドクタ―その他の人々に委せるとして、ああいうことを無暗に、そこらの山のアンちゃん達に真似されたら、ドエライことになるであらう。のぼせてはけない。限界能力を試めすのはよいが、ブルの二の舞いは止めにしたい。トニー・ヒーベラーの書いたものによると、山の下には、山登りよりも、もっともつとやり甲斐のある仕事がある、待っている筈だからである。

以上いろいろ、自分勝手なことをいって来たが、横川氏の訳本は、プロード・ピークの初登攀に関する限り優れている。是非読んで頂きたい。尚、この本の原本の紹介は「山と深谷」の三十八年十一月号に、私が書いている。読めば一応のご参考にはなる。

(吉沢一郎)

× × × 近頃の 本 × × ×

近頃の若い者ではない、近頃の速成の本は、いい加減なのが多いようだ。私は、多少とも登山や探検に関係のあるものなら出来るだけ買って読むようにしている。一行位は参考になることが書いてあるからである。

それにしてもどうせ出してくれるならもう少し良心的に調べたらと思うことがよくある。

最近出た「アマソンの裸族」――

ヘルムート・シツク著、鬼生田貞雄訳、二見書房――は南米に關係があり、歩いているところがブラジルのマツト・グロッソで、今まで余り人が歩いておらず、且フォアセットの踏跡のことも書いてあつて参考になったが、いくら探しても「その年の十二月」とはあるが、全然歩いた年が書いてない。その上、前書、後書、解説もないものの一つ。

次に「小説、チベット」――稲垣一城著、桃源社――これには一九〇四年のヤングハズバンドやスタインその他が出てくるので買った訳だが、「あとがき」のあるにも拘わらず、山の描写のくだりにはガツカリした。少し大袈裟に書いたって小説だから、といつてしまえばそれまでだが、高きも名前も滅茶苦茶、虎ヶ丘からのエベレストはカブルの左のバルートの左にずっと遠く頭を一寸出している(而もマツカルの方が大きく見える)に過ぎない筈。悠然と姿を現す訳はない。それに本の前後にあるチベット概念図、ツアンボ河、マナサロー湖、ラカスター湖、サトレジ河がみんなつながっている。余程の天変地異でも起らない限り、こんなことにな

る筈がないが、私のところにはまだそういう情報が入っていない。前書とともに、本屋には注意しておいたが、まず返事は来まい。

(吉沢一郎)



中村清太郎 画

会員通信

にて西俣川出合に行く。そのために二軒程歩かずにすんだ。ここで装備をかき足す。初めのうちは、あたりの新緑と水の青さの調和のとれた美しさに、足

も快調で進んだが、だんだんとその調子も、荷物の重さを感じると共に落ちていった。

鉢山跡につく頃は雨もしげく、約一時間の行程が、実に長く長く感じ大熊小屋についた時はほっとした気持であった。

田中さんは、この疲れにもめげず我々一行のために、せつせとおいしい料理をつくってくれた。

五月二日、朝六時目をさまして外に出ると、昨夜心配した雨も上っていた。明日は停滞だときめこんだ皆んなもびっくり、ただちに出発準備にとりかかった。

七時半元気に一杯清水から杓差岳へと向う。

今日の登り大熊尾根は実に快的で、雪椿の花が一杯に咲きほこっている群落の間を登りつめると、新緑の山々のかなたに、朝日の連峰が美しい残雪の模様を見せてくれたことは印象的であった。一杯清水で水を補給して、カリヤス平

に歩度をはやめた。

この辺は今までと異なり一面の雪田で、すこしばかり驚いた。

新六池の手前で昼食をとり、杓差岳に向った。この辺にきた頃より、雲行きがややしくなり、霧雨の中を、杓差より鉢立・大石・頼母木平と足を早めた。しかし、杓差より、人の都合で荷物が増え、ためか、速度が遅れがちとなり頼母木平につく頃は、午後四時半を少し廻っていた様だ。

ときたま、霧の間より姿を見せる地神、二ノ峰、一ノ峰などカメラにおさめ今日の宿泊地門内岳の石室にそいだ。

地神をすぎるところより、雪は非常に多くなりいたる処に雪田あり、雪堤あり、飯豊は、やっぱり深いな、と一人でつぶやきながら暮れんとする稜線をしばし張頂った。

午後七時半、やっと門内小屋に入る事ができた。中には先客があった。やはり団体で活躍する自衛隊の通信隊の人々だ。……

五月三日朝、あまり天気は芳しくない。御西岳より大日岳に向うコースをやめ、北股岳より中の峰を下り湯の平に行く事にした。

今日のコースは、下るだけでゆっくりと小屋をでる。途中で国体の為の荷上げの人々と逢う。湯の平最後の下り逆立峰よりの下りは実につらかった。湯の平の

城津の奥の人

上

古沢肇

△はじめに▽

世間には展覧を趣味とする、掃苔家と呼ばれる人がいる。私は格別墓碑に興味をもつわけではないが、この数年余暇を見て、大島亮吉氏そのほか著名岳人の墓を訪れたので、その一部を書きおきたい。

――大島亮吉氏の墓――

大島さんの墓は、文京区駒込蓮葉町二三、真浄寺（真宗大谷派）にある。一体に駒込というところは古い寺の多いところで、戦災を受けて模様は変わったが、それでもなお明治の東京の面影が残っているところだ。真浄寺は都電の蓮葉町の停留所から近い。石の門を入って、戦後の新しいコンクリート造りの本堂に向って右側が細長い墓地で、その奥の方に大島さんの墓がある。高さ一米余りの平凡な角塔で、正面に南無阿弥陀仏、下の台石に大島氏と刻まれ、丸にかたばみの紋がある。

墓標右側面に「釈亮友信士 昭和三年三月二十五日 俗名亮吉」大島さんの遭難の年の六月に建てられ、つづいて六年に父君、九年に母君が亡くなり、大島さんの死と相前後して兄妹が亡くなったことが石に刻まれた文字で知られる。

大島さんの遺族は現在一人もいない

という、先年慶応登高会で何年忌かの法要を営まれたばかりは、めったに訪う人もないそうである。古くもないのに墓石が緑苔色をおびているのもさびしいかぎりである。

大島さんの遺稿「涸沢の岩小舎のある夜のこと」を読むと山での死をさまざまに予想して書かれた文章がある。不幸な山での死は不幸なことばを先駆として突如とおとれるもののようである。小島島水氏は後年この文中のことばを「鬼言識ヲ為ス」の例だと評されたが、登山家には、島水氏や木暮さんのように天寿を全うして巨星と仰がれる人と、大島さんや板倉さんのように短い生涯を美しく光って消えた人があるように思われる。

×

この大島さんの寺から百米も離れていない同じ駒込蓮葉町三二番地に木暮理太郎氏の家がいった。もちろん戦災で町のようなすも一変してしまいい、現在同番地にはミシン会社の倉庫とアパートが建っているが、明治四十二年から昭和五年までのあいだ後年市ヶ谷台町へ移れるまで木暮さんの住まれたところで、日本山岳会や一高旅行部の人々たちとの縁からも深いところである。

大島さんも生前に一度くらいは、この家に木暮さんを訪ねたことがあるかも知れない。

――板倉勝宜氏の墓――

大正十二年一月十七日、立山で亡くなった板倉さんの墓も駒込吉祥寺にある。旧大名家の墓らしく周りも広いが、近年改修されて墓標は新しい。石は二基あるが、どちらが板倉さんの墓か聞

キャンプ地の整地も順調に進んでいた。ここで一泊する予定であったが、多勢の人々が宿泊するので我々は、一路新発田まで一気になつてしまった。

この実地踏査に同行して、私が特に感じた事は、新潟の国体がいまままでのお祭りの登山より離れ本間に山を愛する人々に、飯豊の山々を通して、山のよさを味わってもらおうとする努力が越後の人々の間にみなぎっている事だ。立派な国体登山ができますよう祈りつつ、藤島さん、斉藤さん、井口さん、田中さん達の御好意に感謝して、新潟をあとにした。

会員吉川良平氏逝く

石黒清蔵

会報二月号越後支部主催小集會に富山支部より出席されたのが載っていますが、当時私は藤島君との関係、高頭元老追悼参列の礼儀からして出席を熱願していたのであったが、仕事上都合つかなく吉川氏に心をこめて出席を托したのである。それがこの四月六日に御病気で突然なくなつた。

氏の山登りは晩学であるが、四年前入会の大世秀治氏とは同業者同窓で莫逆の友である。登山は終始久世氏と雁行し春夏秋冬各地の山々を登り歩かれた。急がないが山を楽しみねばり強いものがあった。全国みそ醬油醸造業連合会会長より業界日本一賞を授与され

ていることを弔辞で知った。

氏は明治二十九年十一月十九日生れ、家は富山市の名門、父は儒者で尊皇家、業は醬油みそ醸造、富山市を襲った戦災で居住方面は最大激甚地であったがよく将来を見通して雄大卓抜な構想をめぐらし、然も急速に復興した。私は特に次の一事を記したい。

それは立山醬油みそ株式会社という名称は単なる商標でなく氏の信条を表したものであったという事である。今日立山とは形態的に剣岳を象徴をしているのであるが、其頂上に自身発願して故実に則って総樺造りの祠を信頼する棟梁に作事せしめ、文蔵君や杉田さん等の友誼奉仕によつて建立されたのである。何一つ誇る事とて求めることなくであった。今日登山家と自称しあちこち山を荒し廻り、或は時勢に乗じて自然を破壊し得々たる事業家の多い世に涙の進める話である。

吉川氏が最も多く登つたのは勿論剣であるが、あの年で冬山も手掛けていた。年令から見て体力で挑むのではなく半ば宗教的な気力で登るものと察する。私は氏の斯種の熱心を生かし分骨を山に埋めたとさへ思っている。本年二月にして孫達と蔵王にスキーを楽しむ有様、年令という制約を忘れた名号通りの「楽山」振りて温和円満な相貌の中に、どこにかゝるスタミナがあるのか驚くばかり。

戦災に糟糠の妻を失い、苦心の経営は軌道に乗り、子息達は夫々安定している儘一時の高血圧から一同の忠諫にて禁酒していたが、何の楽しみとてない親を想うて時と共に黙認されて、久世氏とさしつされたつの楽しい仲であった。悠然と登りつくせし山かすむ雪閉さす剣の祠人訪はで

久世柴の戸

山水のやがて瀨と花筏 古塘私達は共通の友情の下に御冥福を祈りたい。

片瀨 渡辺 公平

天城の中にもこんなにまだ汚れていない道が残っていたのかと嬉しくなつてしまつた。

片瀨峠から片瀨温泉に降りてきた時の感想。万二郎の頂上も、万三郎の頂上も、例によつてチリ、アクタの山、予期していたもののいささがっかり、八丁池から天城峠に縦走するの嫌になり、万三郎を西側に下つた片瀨峠から、方向転換してはじめての道を片瀨に下つた。

日曜日だが一人のハイカーにも会わず、落葉に深ふかと埋れた道静かな森、ワサビ田、それに思いがけぬ立派な滝もあるというわけ、秋にでもなつたらもう一度、この片瀨溪谷を下つてみようと思つた。伊豆の谷としてはそのスケールの大きいことも驚きであった。

き洩した。墓石に九曜巴の紋が見られる。

この吉祥寺(曹洞宗)も戦災のため再建され、本堂は以前にくらべて遙かに小さくなったが、広い寺内に残る公孫樹の老樹や露坐の釈迦如来は昔のままで、幕臣板倉松東の頌徳碑が板倉家とこの寺との因縁を語っている。

小島鳥水氏の墓所

小島鳥水氏の菩提寺は小石川富坂上、真言宗常泉院である。後楽園に近いが、この寺は旧水戸家の家臣との関係が深いといふことが、讀岐高松藩士の小島家との関係がよくわからない。

ここも戦災にあつて本堂は仮普請で荒れた感じである。

鳥水氏の墓をいろいろと想像して行った私はちよつと期待に反した。墓地らしいものはどこにもなく、本堂裏手に鉄筋二階建の納骨堂があり、そこに小島さんは眠つていられたのだ。墓参りというものを古いかたちで考えたものにはなんとなく冷たい感じがしたのもやむを得ないことだろう。鳥水氏は天寿を全うされて昭和二十三年十二月十三日長逝された。七十六才、照光院寿岳久居士。

木暮翁の墓

多磨園、二十二区四十四側五番目、北門の傍にある。国電小金井駅前からバスで行くのが近くてわかりやすい。送電線の鉄塔が目標になる。

墓は御影石の新しい型の角塔で、文字は「木暮家之墓、昭和十三年九月、木暮理太郎建之」と刻まれている。下

部台石に丸に三引の紋が入っている。木暮さんは昭和十九年五月七日、七十二才で亡くなった。法名、知光院理山宗顯居士。

辻村伊助郎のあと

大正十二年九月一日、関東大震災の厄にあつて辻村一家は箱根湯本で山崩れのため亡くなった。当時辻村さんは三十九才、スイス人のローザ夫人と男児三人が運命をともにした。

旧邸のあったところは旧箱根街道沿いの古刹早雲寺(そのとなりが湯本小学校)の前の急崖の山裾である。

辻村さんの遺骸は遭難の後三年目に発見されたが、草表紙の遺言書に「墓は人の胸の中に樹つべきである」と云々と記されているのに従つて遺骨はそのまま比叡山延暦寺に納められた。したがつていまなお墓標は立てられていない。

そして不慮の災禍から四十年すぎたいま、旧宅の跡は岩石のごろごろした藪の茂るにまかせた荒地となつてゐる。石の採掘場と飯場の小屋が一隅にあるだけだ。

山崩れのあつた山腹に最近はいくつ道路が開通して、恰度辻村邸の悲劇のあとを眼下に見下すようにして車が馳駆している。

辻村さんの家は小田原の名家であり、菩提寺は同市万年町の定林山宝安寺(曹洞宗)である。寺の裏手の墓地に辻村家一族の墓が並んでいるが、前記のようなわけであるから辻村さんの名前は見られない。

加藤文太郎氏の墓

(以下次号につづく)



中村清太郎画

三月理事・評議員会

五日・ルーム

△出席者 松方会長、理事折井、辰沼、山崎、武藤、村木、古沢、松田、高橋、深田、評議員神谷、藤井、末松(福岡)、津田(関西)、中田(富山)、石原(東京)

委任 川上、木下、金坂、松本、藤島、川喜田、青木

▽議事と報告

①通常委員会総会開催について

四月二十五日(土)会場国際文化会館を第一候補として、総会終了後会費五百円程度で懇親会を開いたらとの意見あり、この意向により総会を開催すること。

②新年度理事・評議員・監事の推選について

・理事退任 中島伊平、竹田吉文二氏

・理事新任 田村扇一、岩佐吉雄二氏

・評議員新任 村井米子氏その他は再任

・監事は松本熊次郎氏に留任願う

③テンジン・ノルゲイ氏来日につき本会負担経費について

・外務省(航空費、国内交通費、宿泊費)負担のほか本会負担分と

して十二万円程度となることを諒承する。

四月理事・評議員会

二日・ルーム

△出席者 松方会長、渡辺副会長、理事 折井、中島、辰沼、山崎、松田、川上、高橋、評議員神谷、吉沢、藤井、望月、加藤、日高、石原(東京支部)、池田(石川支部)、永井(大分支部)

▽議事と報告

①通常委員会総会開催について

・会場 お茶の水ホールに決定

・日時 四月二十五日 東京支部 午後二時—三時 本部 午後三時—五時

②登山技術研究会(日本山岳協会)実施報告

・三月二十七日—三十日、奥只見において越後支部の協力を得て実施、三田、渡辺副会長ほか六十余名出席

東京支部会務報告

四月一日(水)役員会

一、三十九年度予算案の件

二、第四回登山技術講習会の件

申込受付四月十五日より満員次第締切

募集人員 二十名

期間五月十五日—十九日

三、第三水例会の件

四月十五日

東部ネパール及トウインズ峯

出席者 石原、折井、芳野、野萩、君島、小味、鈴木(伊)、坂倉、山口、富田 十名

五月六日(水)役員会

一、役員役務の決定

一、三水会(五月二十日)

西イリアンスカルノ峰

加藤 泰安氏

一、登山技術講習会の件

△出席者 折井、沼倉、中、鈴木、伊、君島、野萩、芳野、関口、小味、坂倉

一九六四年度

東京支部役員

支部長 石原 憲治

委員長 沼倉 寛二郎

委員 関口 周也

総務 富田 美知子

記録 山口 節子

会計 錦織 保清

庶務 西丸 震哉

企画 三枝 礼子

指導 小野 利次

芳野 萩守

片桐 理一郎

広谷 精啓

鈴木 伊和雄

坂倉 登喜子

中 保

集會 君島 久登

集會 小味 純

集會 鈴木 郭之

集會 倉知 健一

指導 折井 六郎

資料 安彦 夫

図書 山下 夫

監事 (新任) 山下一

評議員 (新任) 山下一

(その他評議員は昨年通り留任)

△東京支部婦人部集會

四月七日(火)

一、世界婦人登山界のニュース

過去五年間の業績について

二、装備(2) 松田 柳子

折井 正子

岡部 浩子

三、気象(2) 基礎編 低気圧について

富田美知子

四、八甲田スキー山行について

係 富田

出席者 十八名

△石川支部便り

雪融けもはげしく望見する山の白さも失われ一段と新緑の映える候となりました。

当石川支部の支部長池田知幸氏が福井県勝山市へ転勤となりましたので、新支部長に磯野三郎氏を推挙し就任をお願いすることにいたしました。

つきまして三十八年度行事報告と決算書お知らせしますのでよろしくおねがいいたします。

石川支部庶務 橋 礼吉

一、三十八年度行事報告

六、二 岩登り講習会 倉ヶ岳にて

七、二九〇八、四 夏山合宿 真砂沢にて

八、一〇一一 石川県体育大会、白山

九、二二 風吹峠・倉ヶ岳 風吹峠・倉ヶ岳

一〇、一九二〇 白山岩間温泉懇親登山

一一、三〇一一、三 スキー合宿

三、二八〇四、四 春山合宿

一、決算報告(略) 白山—三方崩岳 以上

二二一 号訂正

誤

テンジンの来日

4頁1段 インストフ

クター

吉沢氏の質

問

黒部の今と昔(上)

7頁4段 インクライ

ンが、百米

インクライ

9頁1段 恐しく著者

も 恐らく著者

西岡さん、さようななら

8頁4段 凛々乎

9頁4段 羨しい

美しい

二月の戸隠山

10頁4段 戸隠山

12月3日 第四回登山

技術講習会

△住所変更

15頁3段 六〇二六

山内 巖

五〇二六

山内 巖

山岳58年正誤表

(誤)

(正)

目次の二頁目 大阪市立大

二二頁の地図 CVI

一〇六頁の地図 Snow Field

一七二頁上段 狐小屋に

「三行目」に 狐小屋に

対七六頁の写真の説明中アウトライア

ン Outlier (7090) とあるのをラッ

シャールII峰 Lashar II と訂正

九二—九三頁間の二枚目の写真の説明

中アンナプルナII峰 Annapurna II

(7987 m) とあるのをタウラギリII

峰 Dhaulagiri II (7751 m) と訂正

Journals arrived recently (近着雑誌紹介)

Journals

MAZAMA; Dec. 1962, Dec. 1963 MAZAMAS
 APPALACHIA; Mar. Jun. Aug. Nov. Dec. 1963 Jan. Feb.
 1964 Apalachia Mountain club
 National Geographic; Aug. 1961 The National Geographic
 Society
 Österreichischer Alpenverein; 1862-1962 Jun. Aug. Oct.
 (100 Jahre Österreichischer Alpenverein 1862-1962;
 Österreichische Alpen Klub) 1963 Österreichische Alpen-
 klub
 Canadian Alpine Journal; May 1963 The Alpine Club of
 Canada
 Rivista Mensile; Vol. 82 No. 1-2, 5-6, 7-8, 9-10 1963 Club
 Alpino Italiano
 The Mountain Club of South Africa; 1962, Mountain Club
 of South Africa
 The American Alpine Journal; 1954 American Alpine Club
 La Montagne; Juin Oct. 1963 Club Alpin Francais
 Harvard Mountaineering; May. 1963 Harvard Mountann-
 eering Club
 Jugend am Berg; Jun. 1963 Deutschen Alpenvereins
 The Alpine Journal; 1963-1, 1963-2 Austrian Alpine Club

ПРОТИВОЛАВИНИ СТРОИТЕЛНИ СБОРБЖЕНИЯ И КАРТИРАМЕ НАЛАВИНИТЕ

Club Alpin Belge; Oct. 1963 Club Alpin Belge
 De Berggids; Mei, Juli, Oct. 1963
 Deutschen Alpenvereins; Jan. Feb. Mar. Mai, Juli, Aug.
 Sept. 1963 Deutscher Alpenverein
 Jugend am Berg; März Juni 1963 Zeitschrift der Jugend
 des Deutschen Alpenvereins
 Skis love Mckinley; 1963 Haus Gmoser
 Cittadi Trento; 1963 Club Alpino Italiano
 La montana; 1963, 1964 Federacion Argentina de Monta-
 nismo
 Life; Sept. 1963 Time Life.
 Safety in the Mountains; 1963 Mountain Club of Newze-
 aland
 Der Bergsterger; May 1963
 De Berggids; Mei. 1963 Mederlandse Alpine Club
 The Canterbury Mountaineer 1962-1963; The Canterbury
 Mountaineering Club
 58 Jahresbericht; Oct. Nov. Akademischer Alpine Club
 Bern

図書委員会 (中川 武, 倉知 敬)

編集後記

ルムの周りには樹木が多い、三十
 一年の五月マナスル登頂を記念して会
 員広瀬潔氏が寄贈した白樺五本は成長
 して林となり初夏の薫風に枝を靡かせ
 ている。

コンクリートの防火貯水槽の傍の大
 島ザクラも毎年よく花をつける。玄関
 のワキには山吹の大株、矢竹の一群、
 ハツ手の木。椎の木はルムの屋根の
 上まで枝を拡げている。ルムをとり
 まく眺めでいいのは晩秋の夕、黄葉し
 た立木の枝越しに落日のニコライ堂を
 望む風景だ。身の雑聞にあることを忘
 れて思わず足をとめる。裏庭つたいに
 急崖を下りて昌平橋の方へ出る道もい
 い。ニワトコ、犬ビワ、ボダイジュ、
 ツバキなどが茂っている。崩れ残りの
 古いレンガ塀があつて、マユミ、椎の
 木が屋根を被っている。本館の前庭の
 泰山木も季節には美事な花をつける。
 この会報が出るころにはこういった樹
 木たちともお別れのときが迫る。惜し
 いことである。

昭和三十九年四月二十五日発行

東京都千代田区
 神田駿河台四ノ六
 発行所 社団法人 日本山岳会
 編集者 法人 古沢 肇

頒価二十円 電話神田(3)八九五二番
 振替口座東京四八二九番

印刷所 東京都港区赤坂溜池五番地
 株式会社 技報堂